

年以降は不況が続いたため、事業拡大に必要な労働力確保は容易であった。交通では、私鉄と国鉄が競争下であり、運賃割引の便宜を享受できた。海上輸送においても商業港を控えるため、輸送手段の選択肢は豊富で、基本的に好条件にあった。しかし、競合する福山市との競争下では、市場に遠く厳しい状況にあった。伊予の産業の主力は近世から続く商業であり、交通の便を活かし、後背地と大阪を結んでいた。削り節製造業も、近海の高産物を扱う商人資本から発生している。鉄道による商業活発化の反面、松山市勢力圏の脅威と郡中港に依存する地元産業の危機を招いた。その活路を開くものとして、削り節製造は貴重な工業生産であった。

このような場所で削り節製造業は始まり、市場は大阪さらに東京へと拡大した。この過程で福山との競争から、高品質志向戦略を採り、雇用拡大や機械化と、その改良が進んだ。増産から工場規模拡大の結果、3社は並んで立地することになり、域内での競争が各社を刺激した。最終的にはこれが成功し、1935（昭和10）年頃には全国一の生産を達成した。3社は地方政治にも関与し、まさに伊予の舵取りを担う立場に至ったのである。以上、削り節製造業の誕生に伊予という場所が関わり、同条件の他所ではない要素が相互作用して地域の一大産業に成長してゆく過程を示した。

## 会津に生きる・会津を描く：自地域学「会津学」の形成と持続に関する考察

久島 桃代

近年全国各地で地域の再生をめざした、自地域学と呼ばれる活動が盛んである。自地域学は長期的にみれば1970年代後半に始まる地域主義の流れの中の、最も生活空間に密着した、生活者自身が担い手となる地域の見直しの動きといえる。し

かし自地域学は、その活動に参加者の属性の偏りや高齢化、資金不足といった問題を抱えているケースが少なくない。そうした中、本研究がとりあげる「会津学」は、編集者に加え、農業従事者、会社員、主婦、1ターンしてきた若者といった様々なタイプの地域住民が、5年にわたりほぼ独力で、聞き書きを主体とした非常に分厚い地域誌『会津学』を作り続けてきた。

本研究の目的は次の2つである。すなわち、①「会津学」の活動の経緯やその内容を紹介するとともに、旺盛な活動の背景にある主体としての参加者たちの思いを明らかにする、②「会津学」の活動から自地域学、地域主義・内発的発展論を逆照射する。

研究方法は、以下のとおりである。すなわち、①地域主義・内発的発展論の論旨とそれに関わる地理学の議論を文献に基づき整理する、②自地域学の概要とその実態と課題について、主にアンケート調査によりながら明らかにする、③自地域学としての「会津学」の活動の目的や意義を、1)『会津学』の誌面の分析と、2)活動への参与観察、3)参加者たちに対する聞き取りから検討する。その結果明らかとなったのは、以下の点である。

地域主義・内発的発展論には、中央集権的で画一的な地域開発・地域振興策への、研究者たちの強い疑問と批判の視点が見出される。彼らは地域に内在する豊かな資源（自然・歴史・伝統）に根ざした、主体的で独自の地域づくりを志向している。その際期待されるのは、地域を深く理解しかつ地域の問題を自力で解決しようとする地域住民たちである。こうした主張に対して、日本の地理学からの反応はどちらかといえば批判的なものが多い。とりわけ、「地域」概念の理論的な側面からの批判が多く見られる。しかし日本の農山村の地域振興に取り組む地理学者の中には、地域主義や内発的発展論と同様、地域資源に依拠した地域住民の主体性による地域づくりを志向する研究者もいる。

全国の自地域学に対するアンケート調査からは、前述したような特徴のほか、自地域学が地域学習中心の内容となっていることが明らかとなった。また一部ではあるが、活動の意味や意義が活動主宰者に十分に把握されていないケースが見られた。

「会津学」の主要な舞台である奥会津地域は、深刻な過疎化高齢化の問題を抱えている。そうした地域の現状に危機感を抱いた地元有志の出版グループ・奥会津書房の代表であるEさんと、農業従事者のKさんが地元で独自に聞き書きをしていたことが「会津学」誕生の契機となった。

『会津学』の原稿には、次世代への伝承を目的に過去の集落の暮らしや人々の生き方を地域の古老たちからの聞き書きを中心に記録するもの、執筆者たちが自らの生活経験を題材に、今会津で生活する自分自身の生き方を描き出すものがある。「会津学」は、自らの足元に着目し丹念に記録していくことで、今後の生き方を考えようとしている。『会津学』の編集を一手に引き受けるEさんや、自身の聞き書きの経験を参加者たちに積極的に伝えようとするKさんの姿勢からも、そうした「会津学」の理念が伺える。

それ以外の参加者に着目すると、彼らがEさんやKさんの姿勢に強く感化されながら、自身の身近な生活に目を向け聞き書きを行っていることがわかる。なかには他所から嫁としてやってきた若い女性が、自らが引き受けている暮らしを生き生きと伝える原稿もある。そのような執筆者たちの姿勢からは、会津で生活する自分自身を見つめ積極的に肯定しようとする態度が伺える。活動の中心人物であるEさんやKさんの情熱とネットワーク、そして研究会活動が開催され『会津学』の編集が行われる奥会津書房という「場所」の力が、大部の『会津学』を現在まで刊行させ続けている源泉になっている。

他方「会津学」の活動から地域主義・内発的発展論をみると、これらの理念の一部が、「会津学」

の中で実践されていることに気付く。これらの思想は、主体としての地域住民に着目しながら、その内部の多様性はそれほど重視されていない。しかし「会津学」には、活動を牽引する主体や、彼らに影響され活動に参加していく人々という重層性が見出される。

「会津学」は、他の自地域学と比べ、日常の暮らしを「聞き」「書く」ということを追求することにより、独自の成果を挙げている。しかし一方で、こうした「会津学」の特長は、一方で、著しく高齢化が進行する地域の現状の厳しさとそれに対する主宰者たちの切実な思いを反映したものである。